
恋姫†コック

尾時山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫＋コック

【Nコード】

N3628BA

【作者名】

尾時山

【あらすじ】

「いらっしやい。飯？何を食いたいんだよ？」

恋姫無双の世界に迷い込んだ、高校生のコックが料理で生き抜くバカ作品。

始まりの巻　くバナナミルクは甘い誘惑く



「はあ……。親父も人使いが荒いよなあ……」

学ランに袖を通しながら、エプロンを身につける少年。大きな厨房で、ガスコンロに置いたフライパンに火をかけた。

白く輝く鶏の卵を片手で割り、牛乳と一緒にボールに入れ、菜箸で混ぜた。後ろから若い男が、それが気に食わなかったらしく、文句を言った。

「お前、ここフレンチレストランなんやから、泡立て機使えや」

「泡立て機だとホイップになっちゃうだろうが！それよりも後ろの蜂蜜取ってよ」

仕方なく蜂蜜を取ってやる。蜂蜜を受け取った少年は、ボールにそれを出し、そのあとにグラニュー糖を入れた。

食パンをどぼんと潰け、良く熱されたフライパンにバターを落とす。菜箸でバターを万遍なく広げ、ベチャベチャになった食パンをフライパンに投入、焼きはじめる。

一般的なフレンチトーストだ。残りの汁を全部入れ、フライ返しでひょいっと返し、焦げ目が付いたのを確認すると、皿の用意を始めた。

脇に、飾り付けでミントとチョコ、キャンディを置き、メインのトーストを乗せると、冷凍庫から出したバナラアイスをまるごと一個乗せ、オレンジソースをかけ、完成。厨房からそれを持って出ると、綺麗なテーブルクロスを引いた高級そうな机が所々並ぶ――所謂店内に、注文した、子供連れの家族の方へ行った。

「お待たせ致しました、フレンチトーストとオレンジソースをかけたバナラアイス、ミントとチョコを添えて、でございます」

「わあっ、美味しそう!!」

子供――小さな男の子が、少年の方を見た。少年は男の子の目線と同じ高さになるようにしゃがみ、ポケットから、ビスケットを差し出した。

「お兄ちゃんから、ボクへ」

「ありがとう!!」

あまりにも可愛いので、男の子を撫でた。フォークを持った男の子がトーストをアイスと一緒に食べる。甘い世界が口に広がり、笑顔が大きくなった。

「美味しい!!」

「よかった!よし、お兄ちゃんがもつとサービスしちゃおう!」

「本当!?じゃあ、ママとパパにも、美味しいもの作ってあげて!」

「うん。では奥様、旦那様。今から、料理が来ますので、何か疑問がございましたら、持ってきた者にお聞きくださいませ」

どうせフレンチだけだがな、と少年は心でぼやいた。フレンチを食すのは悪いことではない。が、それだけでは飽きてしまう。親の仕事上、仕方のないことだが。

「あ、そういや買い物行っただけ」

自宅の食材が無いことに気付いた。店はどうにかなる。買い物の方が優先だ。

少年はエプロンを脱ぎ、店を出て、スーパーまで自転車を漕いだ。

「あつたぜ、今日の最終お買い得商品、『十勝のモくさん元氣牛乳』1L2本で120円！6本は買ってや——」

店のカゴに、お買い得商品を詰めながら回る。牛乳のコーナーに着くと、牛乳をそのまま持ち逃げしようとする人間がいた。

「おいアンタ、何してんだ」

首根っこを掴む。顔を覗き込むと、目付きが悪く、歯がボロボロの男であった。

「アンタ、モくさんの元氣を金払わず貰うつもりじゃねえだろうな？」

「なんだよお前！！」

「いいから聞け。そんなことしたらモくさんは泣くぞ。いいか。モくさんの元氣が欲しいなら、これで貰いな」

120円を財布から出して渡した。男は金を貰うと、礼も言わずにさっさとレジに行ってしまった。

「モくさん、あいつに買わせてよかったのだろうか」

今更ではあるが、何か心配だ。レジに向かうと、その心配が現実になっていた。

レジの店員を襲い、金を要求していた。少年はカゴを置き、顔面にドロップキックをお見舞いしてやった。

「モくさんが泣いてるぜ!!」

「ちくしょお……。てめえ、邪魔くせえんだよ……」

懷からナイフを出した。少年はそれに憤慨し、ナイフを出した手を掴み、肘で腹を打ちながら投げた。

「料理に使えるもんを凶器にすんじゃねえ! 牛や豚に呪われるぞ!」

ゲームで見たものをそのままやってみたが、上手くいったようだ。男は完全に延びていて、レジカウンターの台に突っ伏していた。

「モくさんを眼眩ましめくらに使うんざ、ふてえ奴だな!!」

カゴを持ち直し、レジに向かって会計を済ますと、自転車でレストランではなく自宅へと向かった。

「ただいま、って誰もいるわけないか」

父はまだ仕事だ。母も別れてしまったために、この家にいるわけがない。

冷蔵庫に、買った物を綺麗に入れ、小腹が空いたので、バナナと牛乳、バニラエッセンスを使い、簡単なバナナミルクを作って飲んだ。そのまま二階に上がり、自分の部屋に入ると、買っておいた濡れ煎餅を脇に、料理雑誌を読み始める。

「美味しいエビチャーハンねえ……。油をそんなに使わないで焼くか」

フレンチ以外にも、中華や和食なども作れる。というか、今はそれらの方が上手い。

「オイスターソースの量、多くないか？もっと減らして、香づけした方がいいような……」

舌の感覚が冴えている。伊達に鍛えてはいない。

「よし、実際に作ってみっか」

雑誌とバナナミルクを手し、ドアを開けた。

しかし、目の前に広がったのは、自分の家の廊下ではなく、宮殿の中の様な、豪華な作りの通路であった。

「……。夢でも見てるのかな？」

ドアを閉め、考える。ここは、自分の家だったはずだ。間違いは無い。

もう一回ドアを開ける。目の前には、長い桃色の髪をした少女、綺麗な黒のポニーテールの少女が立っていた。

静寂の空気が漂う。それを先に破ったのは、少年だった。

「……あのー、どちらさまでしょうか？」

「……曲者か!?!」

「あつ、えつ、へえっ!?!」

黒のポニーテールの少女が声を張り上げた。桃色の髪の子はおどおどしながら、少年に声をかけた。

「一体、どこから出て……」

「あ、あの、後ろのドアから……」

ドアノブを回し、開く。見間違えるはずのない自室。

「どうなってんだよおっ!?!」

「姉上、その者に触れては――」

ぞろぞろと大勢の人間が来た。少年は自室に逃げ込み、バナナミルクをテーブルに置き、深呼吸しながら座った。

「何かの間違い何かの間違い……。ここは俺ん家、ここは俺ん家……」

「わぁー、面白そうな物がいっぱいー!!」

「……え?」

一人で逃げ込んだと思ったら、桃色の髪の子が、ちゃっかりついてきていた。

「んー、これは? 『美味しいエビチャーハンの作り方』……」

「あ、あの、お姉さん? なんであつて来たんですか?」

「へ? だって、面白そうだったから」

マヌケ過ぎる。少年は呆れた。

「あの、ここはどこなんですか？」

「ここは私達、蜀軍の、成都のお城だよ」

蜀？成都？三国志か。一人で突っ込みながら、少年は更に聞いた。

「お名前は……」

「私？名は劉備、字は玄德！君は？」

劉玄德。蜀の君主か。男のはずだが、目の前にいるのは、完全に女性。何が起こっているのかは解らないが、名前を聞いた以上、答えない訳にはいかない。

「新城 魁……」
あらき かい

「字が魁？」

「いえ、姓は新城、名は魁です」

「へえー」

ゴンゴンと乱暴にドアを叩く音。劉備は「大丈夫だよー」と声をかけた。

「面白そうな飲み物だね！飲んでいいかな？」

「ただのバナナミルクですけど、どうぞ」

飲みかけのバナナミルク。劉備が口にすると同時に、ドアが思い切り開かれ、先程のポニーテールの子が、へそ出しのボーイッシュな小さい子連れ、魁を睨みつけた。

「お姉ちゃん、なにしてるのだ？」

「あつまぁーい！！なにこれ！？スッゴク美味しい！！鈴々ちゃんも飲む？」

間接キス、とまで考える余裕がない。首に長刀を突き付けられている以上、何もできない。

「俺、敵でも何でもなくて、ここの住民なんですけど」

「ここは成都の城。このような所に、貴様の様な無礼者が住めるはず無い」

「俺が住んでたのは！！東京のただの一軒家だつうの！！城なんて知らねえよ！！コスプレ趣味のあるお前らなんざ知るかよ！！」

「東京？こすぶれ？訳の解らん――」

「本当なのだ！甘いのだ！」

「愛紗ちゃんもどう？」

「桃香様……。毒物なのかもしれませんよ？」

「自分が飲んでたモンに毒なんて入れるかよ！」

魁は怒った。長刀の刃の付け根を踏んで、右手でそれを持つ手を掴み、手刀で肘を打ち、一瞬の痛みで長刀を落とさせた。

すかさず右足に足払いを仕掛け、後ろにこけさせる。鮮やかなCQC。愛紗と呼ばれた女の子は、そのまま気絶した。

「うん、今のは愛紗がいけないのだ。ところでお前、どこから来たのだ？」

「俺はこの部屋の住民なんだよ。本当はこの扉を開けたら、俺ん家の木の板張りの廊下に出んのによ……」

愛紗を自分のベッドに寝かせると、鈴々という女の子に答えた。

「玄德さんの話から推測すれば、ここは蜀。鳳統を失い劉彰を倒し、蜀を手に入れた。そこで、長刀をもったこいつが、美髯公の関雲長だとすれば、アンタは”燕人”、張翼徳か？」

「劉彰様も、雛里ちゃんも生きてるけど……」

「その通りなのだ！ 鈴々の名は張飛、字は翼徳なのだ！！」

鈴々とか、桃香とか、訳が解らん名が出てくる。魁の頭がこんがらがりそうだった。

「その、玄德さんの”桃香”、とか、翼徳さんの”鈴々”、とか、何なんだ？」

「真名は、心を許した相手にしか呼ばせちゃいけないんだよ。私の真名は桃香。魁くんは、私を真名で呼んでいいよ」

「鈴々の真名は鈴々なのだ！！ 美味しい物貰ったし、真名で呼んでもいいのだ！」

「は、はぁ……」

だんだん、理解が出来てきたのか、魁は返事をした。

女性の三国志。それも、史実とは全く違う。

自分がここに迷い込んだのを、魁は後悔していいのか、悪いのか、複雑な気持ちになった。

一品目 プリプリ甘海老チャーハン（前書き）

↓主人公データ

名前

・新あらき城かい 魁

身長

・177cm

体重

・62kg

髪型

・黒の瞼と首の少し後ろにかかるぐらいのショート、サラサラ（ここ重要w）

アイカラー

・水色

年齢

・8／10（ぶどう）産まれの18歳

趣味・特技

・CQCなどのミリタリーアクション

・料理

好きな物

・牛（牛乳好きだから）

・銃

嫌いな物

・包丁を使って危ないことするやつ

能力（?）

・絶対味覚の持ち主

備考

・彼が2歳の時に母が浮気し両親は離婚。父に引き取られるが、父

の料理Ⅱビジネス思考が嫌いな為、父が嫌い。

・幼いころから舌がよい。味覚は人より何倍も優れている。

・MGSのオタクである。そこから軍事にはまり出した。

・専門はフレンチだが、イタリアンや和洋中など、ジャンル関係なしに料理が得意。

・牛や豚などから栄養を貰っている存在でありながら、人を切る為に包丁やナイフを使うことを嫌う。

一品目 プリプリ甘海老チャーハン



「……ん？」

愛紗が眼を覚ますと、先程魁に倒された部屋の天井がまず見えた。

「あ、起きた」

魁が顔を覗き込む。自慢の青龍偃月刀は無くなっていた。素早く起き上がり、後ろの、魁が趣味で買ったガスガンの SOCOM Mk. 23 を、バレルを持ち、打撃武器の様にした。

「やめとけ。殴り掛かって来たら、今度は本気で怒るぜ」

「……」

「はあ……。雲長さん。桃香さんに言い付けるぞ？『友人に手を出した』って」

「桃香様を軽々しく呼ぶ……あれ？友人？」

「さっきなった。鈴々ちゃんともなったよ。いいから、銃を下ろしてくれないか？てか、その持ち方だと自爆するぞ？」

セイフティは外してある。しかもこのガスガン、ゴム弾を撃てるように改造してある。また、実銃と同じガスを使用している為、暴発する恐れもある。

「指が焼肉になるぞ。銃を渡せ」

「……」

また攻撃されるのではないか、と警戒する。しかし魁は反撃していない。

「あのな、さっきのも、アンタが攻撃しようとしてたから、自己防衛に出ただけなんだぜ？」

「……確かに、私に非があった。しかし……」

「ああ、めんどくせえ。俺はアンタの敵じゃない。言っている意味が解るか？ 危害を加えるつもりはない。だから、銃を渡せ」

それでも渡さなかったら、CQCで銃を取るつもりでいたが、嫌な顔をしながら銃を返してくれた。魁はセイフティをかけ、ベッドの上に優しく置いた。

「雲長さん。この件は水に流して、宮殿の案内をしてくれないか？」

「不審者を案内して――」

「あんたの君主が、雲長さんに案内してもらって言ってたんだ。君主の言うことを聞かないのかよ？」

言い方は悪者そのものだが、それでも効果的ではあるだろう。愛紗はしぶしぶ了承し、後ろについて来いと言ったので、それに従った。

「所で、私の武器は？」

「ああ、鈴々ちゃんが持って行ったぞ」

「鈴々とも親しくなったのか、なんて奴……」

「なんで俺、こんなに嫌われてんの？」

はあ、とため息を付きながら、魁は歩いた。

「ここは庶務所。普段はここに、大抵の人間がいる。何かあったら、

ここを訪ねるといい」

「へえ。雲長さんもここに？」

「私は、時によっては兵社にいたりもする。ほら、そこにあるだろう？」

窓から覗くと、大勢の人間が、武術の鍛練をしている。槍や、弓や、馬術など、様々である。

「この通りを突き当たると厠へ行ける」

「まさか、水洗じゃないよな？」

「水洗？なんだそれ？」

やはり。トイレは水洗にしてやろう。魁自身、工学などの知識は中々あるつもりだ。

「ここの階段を上がると、姉上の桃香様のお部屋があったり、私達の寝所があったりする。下ると、大食堂と、厨房がある」

「厨房かあ。火は、薪からか？」

「それ以外に何を使うんだ？」

「俺はガスっていう魔法の気体を使って火をつけていた」

「ガス……」

「ここだと、東シナ海、つまりは呉の国から取れるはずだ。精製は面倒だけど」

「色々な事を知っているな」

「俺は雲長さん達より遥か未来の人間なんだよね。生活は時代と共に変わるんだよ」

「なるほど……。ああ、そういえば、名前を聞いていなかったな」

「性は新城、名が魁だ。覚えておくれよ、美髯公……。いや、髪が長くて綺麗だから、美髪公って呼んだ方がいいかい？」

「き、綺麗……」

照れて顔を赤くしてしまった。魁は素直に、この髪の艶やキューティクルを素晴らしいと思った。自身も男としては多少長めで、しかもサラサラである。しかし、愛紗には流石に負けてしまうだろう。

「ここに男はいないのか？」

「武将としてはいない」

「へえ。珍しい」

髭面の強面な男が広大な野原を駆け抜けているシーンが自然に眼に浮かぶ。が、この世界にそんなことは無いようだ。

「雲長さん。腹は減ってないか？」

「そういえば、昼餉がまだだった……」

「よっしゃ。特別に、俺が飯作ってやる」

厨房に入りたいがだけが、さっきのエビチャーハンを作るのにも調度いい。毒を入れないかと眼付けで愛紗はついて来たが、魁は毒なんて持ってないし、まさか厨房に毒があるはずはない。

慣れた手つきで、炊いてあった米を小さな器に移し替え、卵と一緒に混ぜる。

「醤油は……ある？」

「ああ、これか？」

赤い瓶詰の液体。少しだけ器に入れ、また混ぜた。

中華鍋を出し、油を少しだけ引き、火にかける。火は愛紗が付けてくれた。

甘海老の殻を向き、蒸し器を持ち出して蒸している間に、中華鍋に先程のごはんを投入、ニンニクを薄く切って入れた後に炒め始めた。

「手際がいいな……」

「料理人だからな」

適当に野菜を細かく切ってまた炒め、少し焦げ目が付いたのを見ると、皿を勝手に出し、置いてあった桃の葉を飾って、メインのチャーハンを入れた。

蒸し海老も調度良く出来上がり、綺麗なごはんの丘に滑らせながら入れ、蓮華をつけて愛紗に差し出す。わずか15分の出来事。その早業に愛紗は感心した。

「召し上がれ」

「い、いただきます」

毒はない。アツアツのチャーハンを一口。

口に広がる海老のうま味と、卵を絡めたごはんの甘味。醤油で塩味を出して、ちょうどいい——、いや、美味の料理になっている。

「美味しい、だと……？」

「美味かったか。そりゃよかった……って、なんで泣いてんだ」

あまりの美味さに、感動し始めた。蓮華に涙が落ち、キラリと光る。

「この世には、こんなに美味しい物があったのですね……」

「なんで敬語？」

ウルウルと眼を輝かせ、魁を見た。完全に胃袋が制圧されている。

「この愛紗のこれまでのご無礼、お許しください、魁様」

「え？ああ……、へ？雲長さん？」

「字ではなく、真名で呼んでください。貴方の味に感服しました」

誰だコイツ。人が変わっている。

「あれー、魁くん。お料理？」

「ああ。食べさせたら、愛紗さんが泣きはじめちゃって」

「あららあ」

一人眼を閉じ、未だに味を忘れられぬ愛紗を脇に、桃香がチャーハンを口にした。

「……うん。愛紗ちゃんの気持ちは、よくわかった」

ニツコリと桃香が笑う。魁の手を握り、こう言った。

「君は、味の神様だね！」

「……はあ？」

確かに、自分の味覚は、普通の人よりかはいい。だが、いくらなんでも神は無いだろう。

「愛紗さんも、桃香さんも、チャーハン食ったくらいで——」

「いやはや、こんなに美味しいお料理を食べたのは、生まれて初めてだよ」

「魁様……、貴方の料理、私の胃袋を見事に討ち取りました」

「愛紗さんの言ってる意味が解らんのだが……。気に入ってくれたんなら嬉しいよ」

「気に入った？ いやはや、これはもう、ご褒美だよ」

そこまで言うのは少しばかり大袈裟な気もする。魁は頭をポリポリと掻いた。

「なら、デザートも作ってやるよ。俺の料理を褒めてくれた礼だ」

少し照れながら魁が言った。と、言っても、フルーツや卵しかなので、あまり大層な物は作れない。

「牛乳はあるか？」

「うん、今朝の搾りたてなら」

生乳か。なら、尚更都合がいい。

「洋食系のを作ってやるよ」

二品目 ミルクプリンとフルーツパラダイス



ぱっぱとフルーツを切りながら、生乳と砂糖を入れた鍋を火にかけ、暫くしたに卵白を入れ、混ぜる。空いている竈を見つけると、大分とろみがついてきた時に小さな器に移し、竈にオープンがわりで入れた。

ついでに、生乳だけを熱し、クリームも作り始めた。洋菓子ではクリームは基本中の基本だ。

上にだんだんと分離してきたクリームをおたまで掬い、漉し袋で漉した。白い艶やかなクリームが出来上がる。後はこれを冷やすだけだ。

竈から器をゆっくりと出し、水に付けてそれらを冷やした。キンキンに冷たくなったら、器をひっくり返し、皿に着地させる。

後はフルーツで飾るだけ。なんと簡単な料理だろう。砂糖と、桃の果汁を入れたクリームをプリンの上に乗せた。これで完成。

「杏仁豆腐？」

「ミルクプリン。桃の香りをと共に味わう、な」

発想の料理。ミルクプリンは時々自分で食べる為に作るが、このフルーツ盛り合わせはなかなか出来やしない。こんなに質のいい果実を触ったことはない。瑞々（みずみず）しく、張りがあり、そしてサイズも大きい。

「まさか、生乳を使えるなんて思っちゃいなかったが」

「牛乳は珍しい？」

「未来だと加熱殺菌とかしてるから、純粋な牛乳ってのはあんまり使えねえんだ。加熱すると脂肪分が分離してしまう。この料理に乗ってる、白いこれは、その脂肪分を冷やした物。砂糖と桃の果汁をたっぷり入れたから、甘いクリームになってる。しかし、こんな立派な桃、滅多に見ないぜ」

桃を片手に感心する魁を余所に、桃香がミルクプリンを一口。先程のバナナミルクと同じ、牛乳がベースだが、それよりも濃厚で、またピーチクリームの味もいい。

「おいしいよお、こんなお菓子、食べたことない」

「では、私も」

顔がとろけた桃香に続いて、愛紗もプリンを口に含んだ。

二人並んで顔が緩み、ミルクプリンがぷるぷる揺れながら彼女達の顔を映した。

「軍人さんがこんな顔見せたら、兵士は不気味に思うだろうな」

「ぼわわあゝ」

自分の料理で喜んでくれるのは嬉しい。しかし、彼女らの笑顔は軍人とは思えないくらい無邪気で可愛かった。

「すっごいいい匂いがすると思ったら、お菓子なのか」

「ああ、鈴々ちゃん。食べるか？」

「愛紗達のなのか？いいのか？」

「構いはしないだろうよ。特に愛紗さん達の今の顔ならな」

「それじゃ、いただきますなのだ」

どこの時代でも、女の子は甘味が好きらしい。学校にお菓子を作
って持って来ていた時とかも、まず女子が先に食いついていた。

「美味しいお菓子なのだ！これは、何て言うお菓子なのだ？」

「ミルクプリンって言って、牛乳と鳥の卵の黄身、砂糖で作れる、
簡単な西洋菓子さ」

「みるくぷりんっていうのか。魁は料理の天才なのだな！」

「天才って程じゃあないよ。俺より美味しい料理を作る奴は一杯いる
と思うぜ？」

確かに料理の腕はあると思う。しかし、一番美味しい料理を作れ
る自信はない。

「魁様は、私が食べてきた料理で、一番美味しい料理を作っていた
だいた方ですよ？」

「でも、一番とか、あんまり興味ないんだよな」

「なんで？」

あまり聞いて欲しくはない。親父がビジネスと料理を一緒にして
いて、ビジネスで一番を狙うのなら、息子の魁さえ利用する人間だ
からだ。

魁は、自分の料理で人を喜ばせたい。お金なんかよりも大切なこ
とだと彼自身は思っている。

「料理って、順位を競うんじゃないって、人に食べて『美味しい』っ
て喜んで貰える為にするもんだろ？」

魁は苦笑いしながら答えた。親父の顔を思い出してしまふ。お前

は金を産む機械だ、と言わんばかりの顔をする親父の。

——俺の料理は、笑顔を産みたい。

「お金や順位じゃ得られない物もあるんだぜ？」

「確かに。心とかは得られないのだ」

「そういうことだ」

料理で心が動いたら、作った人間はどれだけ嬉しいだろう。言葉には絶対に表せないと思う。

「そうだ。ミルクプリン、作ってみるか？」

「私にも作れるの？」

「もちろん。簡単だからな、料理下手な奴でも、これを何度か作れば、次第に馴れてくる」

「そうなのですか！よかった……。私、料理は苦手です……」

「誰にでも不得手はあるし、最初から物事が上手い人間なんてそうそういないさ。あ、そうだ……」

学ランを今まで着ていたことに気が付いた。動きにくいし、シワにはあまりしたくない。

「着替えて来ていいか？」

「全然大丈夫！」

お許しが出たところで、魁は速めに部屋に向かった。

三品目 天使の羽餃子（前書き）

更に主人公情報。

・持ってるガスガン（全てゴム弾）

H&K USP

SOCOM Mk. 23

COLT M1911A1

スネークマッチ

IMI DESERT EAGLE

COLT SAA

M92FS

GLOCK 18

COLT M4A1 Carvin

AKS-74U

PSG-1

VSR-1

FAMAS

・MGSで好きなキャラ

ソリッド・スネーク

ネイキッド・スネーク

発狂した大佐

ジョニー佐々木

ジ・エンド

オセロット

三品目 天使の羽餃子

魁は、宮殿の一部屋と化した自分の部屋に入る。誰か先客がおり、青いショートカットに、白い服の女の子が、魁の部屋のポテトチップスをばりばりと食べていた。

迷い込んでしまうのはしょうがない。双方、少しも驚かず、ただ見合った。魁は問う。

「美味いか？」

「ああ。このサクサクとした食感、何かの出汁の様な味、これは美味しいな」

「それは、ジャガ芋を蒸して、潰して、コンソメっていう調味料を入れ、薄く延ばして油で揚げた菓子なんだ」

「ほう……」

サクサクと一枚ずつ食べる少女。気に入ったのか、二枚三枚同時に口に入れる。

「主はこの部屋の主人か？」

「まあな。着替えに着たんだが、見たいなら別だが、少し出ていてくれないか？」

「ふむ、よかろう」

少女は外に出た。魁は学ランをなるべく早く脱ぎ、クローゼットのハンガーに掛けると、黒いTシャツと迷彩柄のカーゴパンツ、鼠色のパーカーを着、内緒で買った茶色のレザーのショートブーツを出した。

「入っていいぜ。ああ、履物は脱いでくれ」

「ああ、解った」

部屋にまた女の子が入ってくる。余談だが、女の子を自分の部屋に入れたのは今日が初めてだ。

「ああ、自己紹介がまだだったな。趙子龍だ、よろしく」

「お、槍の名手の子龍さんか」

趙雲の名前も知っている。魁は三國無双や、吉川三国志などで、武術の名前や物事を大体を覚えている。しかし、この世界では少し違ったことも起きていると解った。鳳統が生きていたり、劉表が生きていたり……。劉璋もちろん生きているはずだ。

「俺は、姓が新城、名は魁。魁が名前だから、魁って呼んでくれ」

「魁か。そういえば、お前から甘い匂いがするが、菓子作りでもしてるのか？」

「ああ、すっごい甘い菓子をな」

「成る程、ここは菓子職人も雇ったのか。メンマ職人も雇ってくれば……」

「俺は料理人だ。メンマの作り方はわからんが」

竹から作るとは聞いたことがあるが、その製法は知らない。

「ふむ、料理人。ちょうど腹も減ったし、何か作ってくれないか？」

「いいぜ。じゃ、厨房に行こうか」

タンスから、愛用の包丁などが入ったジュラルミンケースを出し、趙雲と共に厨房に行く。桃香達はミルクプリン材料を用意していて

くれたが、魁は先程のチャーハンと、もう一品……餃子を作ることにした。勿論、桃香達にレクチャーもするが。

「星、お前もミルクプリンを作りに来たのか？」

「ミルクプリンというものは知らないが、その魁に、少し腹を満たす物を作ってもらおうと思ってな」

「成る程。魁くんの料理はとても美味しいよ、星ちゃん。私が保障する！」

「桃香様、料理人を雇うなら、メンマ職人も雇って下さい」

雇われた覚えはないが。

竈に生乳を入れ、分離した脂肪分を、別の器に入れ、冷やしながら掻き混ぜる。バターを作るつもりだ。

「その中に、混ぜた卵白と砂糖を入れて。後、こいつも入れてみな」

自分の部屋の小さい冷蔵庫から、バニラエッセンスを持って来ていた。2ml程入れ、香を付ける。

固形のバターが出来上がると、先程のチャーハンの残りを、軽く火を通して温め、器に盛りつけた。続いて、小麦粉を水に溶かし、薄くこねて餃子の皮を作った。ここまでの時間は15分。具は、切った豚肉をサッと焼いた物にした。

「焼餃子か？」

「ああ」

バターを中華鍋に落とし、溶けたら餃子を投入。全部入れると、すぐに別の容器に片栗粉を入れ、竈の余剰熱で熱したお湯を入れ、溶く。餃子の羽根だ。餃子が羽根を付ける為の手助けだ。ばあっと

それを流し込み、木の板で大きな蓋をする。少し待つ間に、桃香達に続きを教えた。

「この、四角い竈の中に、器に移したこいつらを入れてあげて、10分ぐらい待つ。固まれば、後は冷やして出来上がり」

「本当だ、すごく簡単」

義兄弟——義姉妹か。彼女達が竈にミルクプリンの液を入れて待っている間、中華鍋の蓋を開け、羽根を付けた餃子を取り出す。バター風味の羽根付き豚焼餃子だ。

「おお、餃子に翼が生えてる」

「本場じゃ、こういうのはやらないのか？」

「ああ。初めて見た」

ちょっと大きめの皿に移し、完成。星と共に食堂へと持って行った。

「おまちどおさま。食べてくれ」

「では、遠慮なく」

チャーハンは塩胡椒の絶妙な加減と、シンプルながらも食べやすい肉で、魁を褒め倒したくなるほどの美味さだった。

続いて、餃子。一つ一つを分ける度、羽根がついて来る。餃子が口の中へと飛び込み、舌に煽られながら、喉へと飛んでいく。

「穏やかな風味、歯ざわりのいい肉、そして皮と羽根……。これは、美味すぎる……」

なぜかMGS3のスネークを思い出した。台詞が全く同じなの

だ。

「そうか、美味いか。まだあるからな、もっと食べよ」

「これは……、レンゲが止まらん」

バクバク食べる趙雲。まるで男子の様な勢いで。

「魁、出来たのか見てほしいのだ」

「おう、どれどれ。引っ張らなくても、俺はちゃんとついてくよ」

鈴々に引っ張られながら、竈の方に行く。自分達でいい具合になるまで焼き、取り出して水に漬けて冷やしたのだろう。見た目は大丈夫だ。

「これを趙雲に食べて貰って、感想貰ってみな」

一人一人、作ったミルクプリンを手にも、趙雲の元へ。腹をぼんぼんと叩きながら、満足した顔で趙雲はいた。

「星ちゃん、これの感想貰えないかな？」

「桃香さま、私の為に、食後の料理まで……。あ、愛紗はなんか怖いから、って訳にもいかんか。鈴々の中々美味そうだ」

「魁様直伝ミルクプリン、私がお前の胃袋を討ち取ってみせる」

愛紗が大分おかしいことになっている。余程料理下手なのだろう。まあ、この程度、間違える筈がない。

「まずは桃香さまから……」

しっとりつやつやの表面。魁のに一番近いかもしれない。

「おお、舌触りがいい……。牛乳のまろやかさ、心地好い甘さ、なんとも言えない美味しさです」

「やったあっ!!」

桃香が跳ねた。その前魁と思い切り喜びのハイタッチをした。

「鈴々……。ふむ、桃香さまより甘いな。あと、この上の白い甘いのも気に入った」

「ああ、それはクリームっていう牛乳の加工品だよ」

「ともあれ、美味い」

「へへん、鈴々でもやれば出来るのだ!!」

ニヤリと笑う鈴々。魁には握手を交わし、嬉しさを表した。

「愛紗の……。色、形は普通だな。それ、食べてみるか」

レンゲで掬い、口に運ぶ。愛紗も感想が楽しみだった。

「二人に比べれば、普通だな。だが、悪くない。甘すぎず、かと言って味がないわけでもない」

「魁様、私はやってみせました!!」

愛紗の喜び方が半端じゃない。笑顔が誰よりも大きい。ころころと変わる愛紗を魁は面白く思った。

「ふむ、魁どの。あなたは、指導者としても、料理人としても、最高の腕を持つな」

「俺なんざ、まだまだ半人前だよ。まだ18の小僧だぜ?これで一

人前は、マセすぎだよ」

「へえ、魁くん、私より年上なんだ」

明らかに桃香達の方が年上な気もするが。

「魁どの、この趙子龍、感服した。よし、愛紗達も認めていることだし、私も真名で呼んでもらうとするかな。星、と呼んでくれ」

「星ね。夜空に輝く星みたいに、きっと槍も輝くんだろうな」

「はは、言い過ぎだ」

面白い一面を見せた。これで少なくとも、蜀の君主と、五虎大将の三人と仲良くなった。

「そうだ、みんなにも魁くんを紹介しなきゃね！」

「皆を呼びますか？」

「うん、お願い」

君主殿から、強力なバックアップ。これなら、蜀では過ごしやすくはなるだろう。その事に魁はとても安心した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3628ba/>

恋姫†コック

2012年1月13日08時46分発行